

隆俊の城、戸田に築く

朝雲流れて 金色に照り

戸田中央医科グループ創設者
中村隆俊の半生

板橋中央病院が地域の元には安芸吉田に、次男患者を増やす中、往診をの吉川元春は養子に行っ担当していた隆俊は、戸て安芸の本庄に、三男の田方面への往診が頻度を小早川隆景も養子に行き増し、戸田地域が急速に安芸の沼田に城を持たせ発展しているのを目の当た。それぞれが、独立しつたりにしていた。自然とつ連携するといつ毛利家戸田辺りにも病院が必要に習い、父末吉は隆俊に戸だと考えるようになって田を任せ、いずれは三男のいた。そんな時、病院に秀夫にも城を持たせる考適した土地を紹介してくえだつた(秀夫は後に上れる人が現れた。

早速、その土地のこと 1962(昭和37)年を兄弟に話したところ、 8月、鉄筋コンクリート兄の哲夫は病院を出そう 2階建ての戸田中央病院と即断。父の教えを生か が竣工し、病床数29床として、三つの城を持つこ スタートした。板橋中央とを目標にしよつと隆 病院から数名の医療スタ俊、弟秀夫を鼓舞した。 ッフに来てもらい、またこつして戸田は、隆俊が 隆俊の北大時代からの親開院することになった。 友であった八代利雄も招毛利元就は、嫡男の隆 聘(しようへい)した。



戸田中央病院が開院。家族らと共に写真に写る隆俊(右)

鉄筋2階、病床数29でスタート

【第7話】

隆俊は院長に就任した。弟の秀夫は副院長。隆俊は自分の城が持てたことで当然のごとく喜び、張り切っていた。

だが、当時の戸田は駅が無く、病院へは京浜東北線西川口駅あるいは蕨駅からバスで来なければならなかった。末吉の経営的視点では、周囲にまだ田園風景が広がる戸田中央病院に、果たして患者が来てくれるのか心配もしていた。隆俊は、患者に信頼してもらえる医療を提供し続ければ大丈夫と周囲に話してはいたものの、父の言つことももつともで、内心不安でドキドキの日々がしばらく続いたのである。

病院は、24時間の診療体制はもちろんのこと、当時の戸田町には消防署がなかったため、町からの依頼で民間病院でありながら救急車を運用した。「5311」という救急受付電話番号を与えられる一方、病院専用の救急車を購入。救急隊員も自前で養成し、地域の救急医療を担った。

男子職員は全員救急隊に入り点呼、報告、訓練(病院の周囲を2キロ走る)を励行し、救急患者に備えた。医療スタッフはもちろん、医事系のスタッフも、病院一丸となり「愛し愛される病院」を目指して、頑張った。(敬称略)

火曜日(掲載)